

漢文訓読における複合動詞の語構成および和文への影響

劉, 洪岩

九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース

王, 燦娟

九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門 : 学術研究員

<https://doi.org/10.15017/1500387>

出版情報 : 芸術工学研究. 22, pp.11-23, 2015-03-26. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン :
権利関係 :

漢文訓読における複合動詞の語構成および和文への影響

The Word-Formation of Compound Verbs in *Kanbun Kundoku* and Its Influence on Japanese

劉 洪岩¹
LIU Hongyan

王 燦娟²
WANG Canjuan

Abstract

This paper researches the word-formation of verbs in *Kanbun Kundoku* and demonstrates the influence it brought to compound verbs in Japanese. For this purpose, compound verbs of two structures that have a high frequency occurrence in the Early Middle *Kanbun Kundoku* are mainly studied hereof: means-result structure and parallel structure of synonyms. These two semantic structures are rare in Old Japanese. This paper holds the argument that the cause of their existence is that due to *Kanbun Kundoku*, the word formation of compound verbs in Japanese was influenced by Chinese. The root cause can be traced to the transformation from ergative verbs to causative verbs and from the redundancy of verb structure to the word-formation morpheme respectively. In this way, this paper gives an explanation to the possibility of grammatical changes under the language contact regarding the word-formation.

0 はじめに

日本語における複合動詞の語構成は、日本語内部の形態素の融合 (fusion) による構成の他に、外的な影響として一部の語構成規則は中国語の統合的規則から影響されたものであることがしばしば指摘される (影山 1993; 野村 1999)。これまでの研究で挙げられた例証はほとんど漢語の語構成であるが、和語における語構成の規則に対する中国語の影響についてはまだ解明されていない課題である。

この問題点の先行研究として、まず挙げられるのは松下 (1927) の理論構造である。日本語における客体関係の語構成には「分析的」(analytic) な特徴がある一方、「客体関係は日本語固有の原辞構成法ではない。漢文の連詞構成法である」とされ¹⁾、日本語における語構成に対する漢文の影響の領域が指摘された (松下 1927:161)。この説を踏襲して、漢文法が日本語にもたらした語構成の影響について、藤井(1989, 1990)、岡野(2000)、青木(2006)などは多くの例証研究に貢献した。

藤井 (1989:15) は「統紀宣命」における複合動詞の和訓を考察した上、これらの複合動詞は「仏教語を中心とする漢語的表現が多く見られる…連文を和らげた表現を採ることによって、和語一語では表し得ない明確で強調的な表現」を作り出すという上代和文に見られない表現面の特徴があることを明らかにした。この結論を継続して、藤井 (1990:28) は「今昔物語集」を考察して、和漢混淆文に現れた複合動詞は漢文訓読文に用いる動詞の接頭辞と接尾辞によって構成されたものが多く見られ、このような語は漢語の翻読語として生じた用語であること

連絡先：劉 洪岩, liuhongyan0104@yahoo.co.jp

1 九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース

Communication Design Science Course, Department of Design, Graduate School of Design, Kyushu University

2 九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学部門学術研究員

Postdoctoral Research Fellow, Department of Communication Design Science, Faculty of Design, Kyushu University

を明らかにした。岡野（2000:753）は「とはずがたり」を代表とした平安和文における複合動詞の特徴を調査し、一部の複合動詞の構成はもともと和文に存在していなかったが、「漢文訓読語の和文への浸透，あるいは和文語・漢文訓読語といった区別の曖昧化の事象として捉える」ことができると指摘した。青木（2006:7）は「水鏡」における複合動詞の諸相を分類し、一部の複合動詞は漢語から直訳してきたものであり、漢語の字面をそのまま日本語に置き換えたものであることを明らかにした。これらの研究はいずれも古代和文における複合動詞は漢文の動詞に影響されたことと例証し、影響の可能性のみを示したが、表現法や文体論の視点に偏る一方、語構成の範疇で漢文法の語構成法則に影響された語彙群の特質、影響の動機付けなどの体系的な把握はまだ考察する余地がある。

これまでの研究に基づき、本研究は次の三つの問題点を明らかにしたい。

- (1) 和文において複合動詞はどのような漢文の語構成規則に影響されたのか。
- (2) 漢文訓読文において和語と漢語の複合動詞にはどのような関連性が示されたのか。
- (3) 語構成の影響にはどのような動機付けがあるのか。

1 漢文に影響される二つの語構成規則

古代日本語における意味構成形式について²⁾、先行研究における複合動詞の分類基準と語構成規則はそれぞれ異なっているが、列挙した用例を概観した上、漢文の語構成に影響された和文の複合動詞は主に二つの典型的な類別があるのがわかる。

まず、古代日本語における複合動詞の構成諸類別の中で、例(4)における「叫びおらぶ」、「臥い伏す」のように「並列動作の累加」の意味構成形式はかなり使用度が低いとされる³⁾（野村 1971:70; 藤井 1989:2）。徳本（2009:116）の統計によると、上代の三つの文献における「並列」を表す複合動詞の比率は表1に示される。

- (4) a 菟原壯士い天仰ぎ叫びおらび地を踏みきかみたけびて。 （万葉集・1809）
- b 世の人なればうち靡き床に臥い伏し痛けくし日に異に増さる。 （万・3962）

上記の調査によると、ジャンルによって並列複合動詞の使用率に大きな差が見える。和文体における低使用率に対して、漢文の影響が強い続紀宣命における使用率はかなり高い。このような「並列」複合動詞が宣命の中に大量に現れる原因について、藤井（1989:15）は「仏教語や詔勅語を中心とする漢語を取り入れており…漢語的表現が多く見られること」を挙げ、漢文の語構成規則の影響を指摘した。

表1 上代資料における「並列」の複合動詞

資料名	「並列」複合動詞数	資料の複合動詞総数	比率
万葉集	104	1035	10.0%
記紀歌謡	6	103	5.8%
続紀宣命	27	160	16.9%

また、もう一つ漢文に影響された典型的な語構成の類別は例(5)における「行き疲れる」、「恋ひ死ぬ」のような「手段－結果」を表す複合動詞とされている（青木 2006:6-9; 徳本 2009:117）。

- (5) a 玉梓の道行き疲れ稲席しきても君を見むよしもがも。 (万・2643)
- b 我妹子に我が恋ひ死なばそわへかも神に負ほせむ心知らずて。 (万・3566)

表2 上代資料における「手段－結果」の複合動詞

資料名	「手段－結果」複合動詞数	資料の複合動詞総数	比率
万葉集	15	1035	1.4%
記紀歌謡	0	103	0%
続紀宣命	0	160	0%

徳本（2009:116）の統計を見ると、上代資料における「手段－結果」⁴⁾の意味構成形式の複合動詞は表2にまとめられる。ジャンル別の区別は見られないが、データ全体を見ると、中古以前の日本語において「手段－結果」の複合動詞の用例はほとんど見当たらない。それに対して、藤井（1989,1990）、青木（2006）の研究に挙げられ

た漢文から浸透した語構成の用例についてはいずれも半数以上が「手段－結果」の意味構成形式であるので、「手段－結果」を表す複合動詞の発達は漢文の語構成規則に影響されたものと考えられる。

先行の諸説に示されたデータを見ると、「並列」、「手段－結果」の意味構成を表す複合動詞は漢文の語構成規則に影響された複合動詞の典型的な例である。先説に提示した影響の可能性にもとづき、次節からこの「並列」と「手段－結果」を表す複合動詞について、漢文訓読文における用例および影響の動機付けを詳述する。

2 「並列」複合動詞に対する漢文訓読の影響

「並列」を表す複合動詞の語構成は上代からの漢文資料の訓読によく見られる。例えば、例(6)は「続紀宣命」に現れる「並列」複合動詞の訓読例であり、例(7)は藤井(1989)に挙げられた日本書紀の古訓の用例である。

- (6) a ネガヒモトム:夫君の位は願求以て得事は甚難。
(続日本紀宣命・第45詔)
- b アラハシシメス:天皇御靈たちの恵賜ひ撫賜ふ事依て顯し示給ふ物在しと念召。(宣命・第13詔)
- c オコシサカエシム:猶し法を興隆しむるには人に依て繼ひろむる物に在。(宣命・第41詔)
- d オヂオソリ:御命を頂受給り歡び貴み懼ぢ恐りて… (宣命・第25詔)
- (7) a 不久如言被其抄掠(カスミカスマ)。(十九・70)
- b 誰能激揚大節。可以顯著(アラハシアラハル)。(十五・402)
- c 次弓削守屋大連手脚揺震(フルヒワナナキ)而誅。(二十・116)
- d 率性任真。無所矯飾(ナホシカザル)。天皇愛之。(六・175)
- e 靡不具給。敬重(ウヤマヒアガム)特異。(二十四・202)
- f 此神有勇悍以安忍。且常以哭泣(ナキイサツ)為行。(一・10)

上例を見ると、前項と後項の訓読は一般的に類義語の形である。意味上、一種の「並列」を表しているのがわかる。このような語構成の規則は漢文訓読文によく見ら

れる。

上例のような並列複合動詞に対して、よく「一訓」や「同語反復」などの形式で訓読される例がある(藤井1989:9; 阪倉1966:439)。例(6)、(7)のような訓読を見ると、もともと並列複合動詞のような語構成は日本語の意味構成形式にはないと考えられる。また、中古の漢文訓読資料において、二語で生硬の訓読でなくても、並列の漢文動詞を訓読し得る。「一訓」や「同語反復」の訓読例を収集した結果、例(8)、(9)が示すように、中古古典の訓読によく見られる現象であることがわかった。

- (8) a 甚深空性皆已了知。
甚深の空性とを皆已に了(しら)し知(しら)して、復疑惑無し。(金光明・卷1)
- b 歸還各向其君長稱歎法師之美。
歸り還(リ)テ各其(ノ)君長ニ向(ヒ)テ法師(ノ)[之]美ヲ稱歎シテ… (法師伝・卷1)
- c 循環表柱，宛轉而上升高雲際。
表柱に循環シテ宛轉(し)而高雲の際に上(ノ)ボ)リ升(ノボ)ル。(西域記・卷1)
- (9) a 將非以秉執規矩局釋大方耶。
將に規矩を秉執(ト)リテ以て局て大方を釈するに非(ず)や[耶]。(義疏・序品初)
- b 僧徒肅穆，精勤匪怠。
僧徒肅穆(ツツシ)ムデ精勤(し)て怠(る)こと匪(し)。(西域記・卷1)
- c 佇立宮門，瞻望所至。
宮門に佇立(タダズマ)フて至(る)所を瞻望す。(西域記・卷1)

上記の例を見ると、動詞の並列は日本語元来の語構成規則とは相容れない意味構成形式であるが、並列複合動詞が中古以降の日本語に多く使用されているのは事実であることが分かる。その変容の原因を遡ると、やはり漢文訓読の影響がある⁵⁾。中古の訓読資料における並列複合動詞の用例調査では、調査資料の訓読文7作品の各一卷のテキストから並列複合動詞の用例、全237例を抽出した。調査したテキストにおける複合動詞の異なり語数は合わせて728例で、全体の32.6%を占めている。これらの複合動詞は次のような訓読が見られる。

昇上（あがりのぼる）、憤懣（おこりいかる）、
 言談（いひかたる）、驚怖（おどろきおづ）、
 欺凌（あざむきしのぐ）、充塞（みちふたがる）、
 崇敬（とふとびうやまふ）、…

この調査結果の全語例を付録の表3にまとめる。表3の調査結果を見ると、並列の意味構成形式は漢文訓読によく現れる語構成であることが分かる。この構造は日本語に余剰的な語構成（redundancy）であると言える。V1とV2は同じ語彙概念構造を表すので、どちらかがなくなっても意味構成は変わらない。たとえばV1+V2=V1の語構成があれば、V2は余剰要素と言える。したがって、並列複合動詞の語構成の過程は余剰要素の複合化である。ところが、中古中国語の一つの重要な特徴として、動詞の屈折的な形態がなくなり、分析的な形式への変容がある。形態的な変化が消滅するにしたがって、二音節（disyllable）の動詞が必要となった（魏 2003:78）。中古中国語の資料における漢訳仏典は最も多く二音節の動詞が存在するテキストと思われる⁶⁾（朱 1992:11; 魏 2003:78; 朱 2009:14）。また、中古中国語において類義の他動詞や非能格動詞の累加がよく見られる統語構造である。このような統合的な関係が模造され、日本語では余剰要素が複合化して語内要素に変容する。日本語には「動作の連続」と「同時進行」の語彙概念構造の他に、漢文訓読の影響によって「並列」の概念構造も成立した（藤井 2001:17）、例えば(10)における例はこのような概念構造の語例である。この概念構造を見ると、V1とV2は完全に同等の意味を持っている。実際には、V1とV2が同時に発生する動作というよりも、むしろ両者は同一の動作をあらわすと言える。

- (10) a 有聞是經能為他演說。
 若有（ら）むヒトは是の經を聞き、能ク他の
 為に演べ説き…（金光明・巻1）
 b 久修諸苦行聞生悚懼心。
 久（しく）諸の苦行を修（する）をば、聞ク
 ヒトハ悚ぢ懼ル心を生ず。（地藏・序）品
 c 迴駕之日乃可開發。
 駕を廻サム[之]日、乃（ち）開ケ發ク可（し）。
 （西域記・巻1）
 d 即當自手掃除持出棄之持水澡灌瀉水。

即（チ）當（ニ）自（ラ）手をモチテ掃除（シ）
 て持チテ出（シ）て之を棄イよ、水を持（チ
 テ）澡（ヒ）灌イテ水（ヲ）瀉ス。（威儀
 經・245）

収集した上記の用例を見ると、「演べ説く」、「悚ぢ懼る」、「開け發く」、「澡ひ灌く」のような語例はいずれもV1とV2が同時に発生することを表す。また、例(11)を見ると、漢文訓読の影響を受け、このような余剰要素の複合化が中古から和漢混淆文をはじめ、他のジャンルに使用される可能性がある。この用例を観察すると、もともと余剰要素であった同等意味の動詞が語内要素として日本語に受容され、一種の強調や類義補足などの複合語に変化した⁷⁾。

- (11) a その事を承りたる人二人ながら怖ぢ恐れ、汗
 を流して寄らざりしかば。（水鏡）
 b 是を嘲り笑ひし子どもは皆死にけり。（宇
 治拾遺・巻2）
 c 眞言の事は、ふみはなくてただとはせ給ひけ
 れば、ことの有さま、又申しのべなどしけ
 り。（今鏡）
 d 但シ、師子ノ時ニ至テ、講ジ説キ止ナムトス。
 （今昔物語集・巻7）

以上の調査から、日本語における「並列」複合動詞の語構成の規則は漢文訓読を真似てできたものであることがわかった。この過程の本質は動詞連続の日本語化である。この過程で、漢文における二音節の動詞が日本語に取り入れられ、同等意味の動詞が累加される。このような動詞連続の構造は日本語では余剰的な動詞表現であるが、同等意味を持つ動詞が複合化して一語化するようになった。

3 「手段—結果」複合動詞に対する漢文訓読の影響

日本語の複合動詞の研究で、例(12)のような「手段—結果」の意味構成形式は通言語的な現象として捉えられる（影山・由本 1997:76）。

- (12) V1の結果、V2
 溢れ出る、溺れ死ぬ、折れ曲る、崩れ落ちる、死
 に絶える、染みつく、流れ着く、泣き濡れる、

滲み出る, 抜け落ちる, 飲み潰れる, 走り疲れる, 降り積もる, 待ちくたびれる…

V1 することによって, V2

打ち上げる, 折り曲げる, 噛み付く, 切り砕く, 騙し取る, 飛び上がる, 拭き取る, 焼き切る, 駆け寄る… (陳 2009:83)

このような構造は単なる動作の連続という複合ではなく, V1 と V2 に関連する項構造に大いに関わっていると考えられる。したがって, V1 と V2 を構造要素として歴史上の「手段-結果」の意味構成の形成を観察する必要がある。

上記の諸説を手掛かりにすると, 意味構成形式「手段-結果」の複合動詞は漢文から模造したものだと考えられる。徳本 (2009) の調査データと比較するために, 訓読資料における複合動詞の用例調査を行った。付録の表 4 に列挙した複合動詞は訓読資料の各一巻のテキストから抽出した「手段-結果」の用例, 全 86 例である。調査した複合動詞の「異なり語数」は合わせて 728 例あり, 11.8%の比率を占めている。これらの複合動詞は次のような訓読が見られる。

飲酔 (のみよふ), 採乾 (とりひる),
尅傷 (きりやぶる), 拂去 (はらひさる),
招集 (まねきあつむ), 備足 (そなわりたる),
折碎 (おりくだく) …

この調査結果の全語例を付録の表 4 にまとめる。上記の徳本 (2009) の調査結果を見ると, 万葉集における「手段-結果」の意味構成形式は異なり語数 1035 例の 1.4% を占めている。この結果と比較してみると, かなり差があることがわかることから, 「手段-結果」の語構成は漢文に影響された意味構成であると考えられる⁸⁾。

また, 中古和文資料に対する漢文訓読の影響を観察するために, 東辻 (2003) の平安時代の複合語索引を調査資料として, 総数 56 ジャンルのテキストで用例調査を行った。調査対象は「手段-結果」の意味構成をあらわす V2 の複合動詞の代表的な 6 項目である。調査結果を付録の表 5 にまとめる。調査対象とした複合動詞の後項は次の 6 項目である。

~死 (しぬ), ~落 (おつ), ~切 (きる),

~碎 (くだく), ~破 (やぶる), ~毀 (こぼつ)

この調査から, 典型的な「手段-結果」の複合動詞はほとんど漢文に大きく影響された和漢混淆文などのジャンルに存在することがわかった。中でも仏教説話のジャンルに最も用例数が多い。表 6 に, 異なり語数 2 語以上のジャンルを列挙する。「今昔物語」の用例数は極端に多いが, 本文の分量を考えると, 他の和漢混淆文における「手段-結果」複合動詞の出現率とは大差がないと考えられる。

表 6 和文文献における「手段-結果」複合動詞の出現数

作品名	出現数
今昔	47
宝物	5
宇津保	5
三宝	4
枕	4
打聞	3
古本	3
源氏	3
法華	2
寢覚	2
蜻蛉	2
拾遺	2

以上の二つの調査から, 「手段-結果」の意味構成形式は漢文から影響されたものだと判断することに異議はない。古代日本語は「統語的能格言語」とされてきた (柳田 2006)。日本語の能格性は主に形態的な格標示と語順の制約にあらわれるが (柳田 2006:181), 動詞には能格性の特徴が見られない⁹⁾。一方, 中古中国語における能格性は動詞の形態対立から変化してきたものなので, 能格性の対立がまだ動詞の統語構造に残留していて, 日本語の項構造とはかなり異なっている。この理論に基づくと, 中古中国語の動詞構造は自・他の二項対立ではなく, 他動詞・非能格動詞 (unergative verbs)・非対格動詞 (unaccusative verbs) の三項対立である¹⁰⁾。他動詞と非能格動詞の場合は中古日本語と大差ないが, 非対格動詞の項構造は下記のように纏められる。

- (13) S+Vua S=O
 A+Vua+O (A によって O が Vua)

(13) の項構造を見ると、非対格動詞の統語構造は他動詞と同じである。いずれも X+V+Y の形式である。したがって、中古中国語に X+Vt+Y と X+Vua+Y は統合的に再分析される可能性がある。つまり、二つの統語構造が同じ X, Y の項を共有することが可能となる。X+Vt+Vua+Y の概念構造は (13) のように纏められる。

- (14) LCS1+LCS2 ⇒ [[LCS2(Y Vua)] BY [LCS1(X Vt Y)]]

Whitman&Frellesvig (2012) は上代日本語には VtVua のような動詞の複合がないと指摘した。下記の訓読資料の例を見ると、漢文における Vt+Vua の結合はそのまま日本語に訓読された。Vt と Vua は中古の漢文における構造要素であるが¹¹⁾、日本語の統語構造に相容れないので、それぞれ複合化して一語化した。

- (15) a 寺有窳堵波相輪摧毁。
 寺は窳堵波相輪有(り)テ摧毁毀レル…(法師伝・巻2)
 b 王今更立伽藍不敢摧毁。
 王(今)更に伽藍を立(てよ)。「不」敢摧毁毀ラジ。(西域記・巻1)
- (16) a 那呬羅山彷彿相望便即崩墜。
 那呬羅山ト彷彿(として)相望て、便即(ち)崩墜(ち)ヌ。(西域記・巻1)
 b 唯恐失墜忝負先王。
 唯(し)恐ラ(く)は失ヒ墜(シテ)サムコトヲ,, 忝(く)先王に負(く)ことカムヤ。(法師伝・巻3)

さらに、和文の定着に従い、漢文における非対格動詞が日本語に V2 として他動詞であられる例が多くなる。中古日本語では、同じ語構成の複合動詞の V2 は活用変化によって非対格形式と他動形式の二種類の構造要素が共存する。次の例は一般的な用例である。

- (17) a ものどもにとりかかりて、つかみこぼし給ふ。

(宇津保物語)

- b おそばへて、「あれ押しこぼちてむ」と腹立ちののしれば。(落窪物語・巻1)

- (18) a 此ノ城ノ内ノ地、皆、熱キ灰ニシテ、焼ケ砕タル火深シ。(今昔物語集・巻9)

- b なにのかひかあらん。身ひとつをのみきりくだく心ちす。(蜻蛉日記・中)

- (19) a 中の君の御方に参りて見たまへば、うち破れたる屏風一具ばかり…(宇津保物語)

- b 蔵ノ前ニ来テ見ルニ、蔵ノ戸打チ破タリ、人入ニタリト見ユ。(今昔・巻10)

上例のような他動形式の用法は、意味構造の面で非対格形式となんらかの関連があると考えられる。影山(2004:122)は上記のような V2 の他動用法への転化は一種の「使役変化」と指摘した。つまり V2 は使役変化(w CAUSE [Y BECOME [Y BE AT-z]])を、V1 は働きかけ(X ACT ON-Y)を表し、概念構造では V2 の使役主(w)の位置に V1 の [X ACT ON-Y] 全体が埋め込まれるから、使役事象の y と結果事象の y が共通の項としてリンクされる。構造要素の複合化の副次的な変化として、このような変化は漢文動詞の本来の素性によっておこる。漢文における非対格動詞は本来強い使役の性質を持っており「使役動詞」(causative verb)とも言われ¹²⁾、非対格動詞をあらゆる接辞の付加は一種の動詞の使役化(causativization)と考えられる(呂1987)。漢文における非対格動詞の影響を受けた日本語における「使役変化」は、動詞の能格性の顕在化の過程である¹³⁾。

- (20) [Y BECOME [Y BE AT-z] BY [X ACT ON-Y]
 [X ACT ON-Y] CAUSE [Y BECOME [Y BE AT-z]

以上の調査によって日本語における「手段-結果」の語構成の規則は漢文訓読を模造したものであるのがわかった。この模造の本質は構造要素としての非能格動詞の日本語化である。この過程では、漢文の非能格動詞が日本語に取り入れられ、複合動詞の後項 V2 として複合化する。

4 おわりに

本稿では漢文訓読文における複合動詞の語構成に対する考察を通して、日本語の複合動詞の語構成規則に及ぼした漢文の影響を明らかにした。

漢文に影響される複合動詞の語構成は主に「並列」と「手段－結果」という二つの典型的な例がある。この二つの語構成規則は中古以前の日本語にあまり見当たらなかったが、中古から和文に現れた用例は漢文の語構成規則に影響された結果だと提案した。「並列」の複合動詞の発達は漢文における動詞の余剰要素が和文の語構成要素として取り入れられ、複合動詞の形で定着するようになる過程である。一方、「手段－結果」複合動詞の成立は漢文における能格動詞は和文において使役動詞の形に変化し、複合動詞の後項として定着する過程である。

本稿の考察を通して、漢文における語構成の規則は日本語における漢語の形成に影響するだけではなく、和語の語構成にも影響する可能性があることを示したい。

注釈

- 1) 古典の言語類型研究の影響を受け、松下 (1927) は「原辞構成」と「連詞構成」という用語を使用した。前者は語幹に膠着の要素を付加する語構成であり、後者は語や形態素の線的な並びによる語構成である。この二つの概念はそれぞれ本論文の「総合的語構成」と「分析的語構成」に対応できる概念と思われる。
- 2) 古代日本語に動詞の複合化が存在しているかどうかは定説はない。吉澤 (1952)、金田一 (1953)、百留 (2001) などは古代日本語に複合動詞は存在しなかったが、「動詞連用形＋動詞」の形はただの二語連続であると主張する。もう一つの観点は複合動詞が古代から存在していたが、ただし「形態的緊密性」は弱かった(井上 1962; 徳本 2009; 阿部 2011; 青木 2012)。本論文に後者の研究成果に準じて、複合動詞が古代から存在するのを論述の前提にする。
- 3) 「並列動作の累加」を表す複合動詞について、野村 (1971:70) は並列動作の累加と呼ぶが、徳本 (2009) における「類義」および「並立」の総称に相当する。藤井 (1989:2) は「類義」と「対義」の複合動詞の意味構成形式を一括して「並列」と呼ぶ。ここで、「並列複合動詞」の呼び方を採用する。
- 4) 徳本 (2009) に「原因・理由」と称するが、ここで「手段－結果」の用語に統一する。
- 5) 中古漢文の二音節動詞における「並列」の意味を表す動詞の比率はかなり高い。朱 (1992) の調査によると、中古漢文における「並列動詞／二音節動詞」の比率を比較すると、『論衡』に 1401/2088 があり、『賢愚経』に 2291/4183 があり、『世説新語』に 715/1541 がある。
- 6) 朱 (1992:24) の調査によると、中古の漢訳仏典における二音節語彙の比率は同時代の漢籍(中土文献)より遥かに高い。動詞を例として、二音節動詞は『百喻経』に 956 例、『雜宝藏经』に 2606 例、『賢愚経』に 4183 例がある。二音節の語彙はすでに語彙の主流となったとされる。
- 7) 日本語だけで記述された例で複合動詞が漢文訓読に直接に影響されたと判断しにくいだが、これまでの研究に和文における複合動詞の漢文依拠に対する考察があり、参考になった。青木 (2006:10) は複合動詞を例として、和文資料において漢文訓読語が多く存在すると指摘した。例えば、「複合動詞に共通するものが多い…『宇津保物語』は和文の中では漢文訓読語の使用が目立ち、文体的には純粋な和文とは言い難い作品である。『水鏡』も漢文体の依拠資料の影響で少なからぬ漢文訓読語が使用されており、漢文訓読語の混在する和文という意味での共通性はあると言える」と述べた。
- 8) 古代漢語における「手段－結果」の語構成について、石 (2011:47) は認定の基準を提出した。「V＋死」を例として、「百餘人炭崩盡壓死」のような用例では「死」は自立の動詞と複合動詞の一部の中間的な要素であるが、「秦時六月皆凍死人」のような目的語が使用できる用例では「死」は複合動詞の一部だと思われる。この調査では、中世の使用頻度を見ると、「V＋死＋O」の使用率は 143/220 である。また、もう一例の調査では、劉&魏 (2000:2) は『朱子語類』の用例を見ると複合動詞の中に「手段－結果」に認定できる語例の比率は 619/4878 である。このようなデータから漢文における「手段－結果」の複合動詞は同時期の日本語より明らかに高いのがわかった。
- 9) 能格性をもつ言語が一般的に「形態的能格言語」(morphologically ergative language) と「統語的能格言語」(syntactically ergative language) に区別される(Comrie 1978; Dixon 1994)。前者は屈折などの形態的変化で能格性をあらわすが、後者は語順や統語標識で能格性をあらわすとされている。
- 10) 上代中国語は動詞に豊富な形態的な変化があり、能格性は接辞の付加などの形態変化によってあらわれると思われる(Yakhontov 1960; Pulleyblank 1973; Li 1983; 潘 1991)。中古中国語には屈折的な形態変化が消失したが、能格性の対立がまだ動詞の統語構造に残留している。
- 11) 漢文における Vt+Vua の構造は語レベルの構造なのか統語レベルの構造なのかについて論争がある。王 (1964, 1989)、呂 (1987) など一種の複合動詞とされるが、太田 (1958)、Shi (2002) などは Vt+Vua は一種の「動＋補足」構造と見なす。この問題について、語構成の観点で把握するのを主張したい。つまり、Vt+Vua の語彙項目は再分析によって「動作動詞＋能格動詞」の統語構造に成立したものだと思われる。
- 12) 動詞の能格性の理論が発端した以前、Chao (1968:194) は漢文における対格動詞を「使役動詞」と称する。
- 13) 「能格性の顕在化」という観点は複合動詞の対照研究から得られたの

である。望月（1990:249）と王（2005:178）の考察によると、日本語には「使役動詞」のような概念はないが、漢文の複合動詞の後項は一般的に能格性を持つ使役動詞である。それに対して、日本語には能格性を持つ形式で後項動詞をあらわす。

付録

表3 訓読資料における「並列」複合動詞

漢文表記	前項訓読	後項訓読	出自
昇上	あがる	のぼる	金光明
欺誑	あざむく	たぶるかす	金光明
洗濯	あらふ	すすぐ	金光明
冶鍊	うつ	ねやす	金光明
親穆	うるはしぶ	むつぶ	金光明
擇取	えらぶ	とる	金光明
銷鍊	けつ	ねやす	金光明
持照	じする	しょうする	金光明
遵敬	したがふ	うやまふ	金光明
示教	しめす	をしへる	金光明
了知	しらす	しらす	金光明
知識	しらす	しるす	金光明
知見	しらす	みせる	金光明
摂持	せつす	じする	金光明
罵辱	そしる	かずかしむ	金光明
乖違	そむく	たがふ	金光明
漂泛	ただよふ	うかべる	金光明
堪忍	たへる	しのぶ	金光明
恭敬	つつしむ	うやまふ	金光明
願求	ねがふ	もとめる	金光明
宣説	のべる	とく	金光明
講説	のべる	とく	金光明
演説	のべる	とく	金光明
策勤	はげみ	つとめる	金光明
晃耀	ひかる	かがやく	金光明
熔銷	ひたふ	けす	金光明
披著	ひらく	きる	金光明
羸瘦	みつる	やせる	金光明
分離	わかれ	はなれる	金光明
教示	をしへる	しめす	金光明
覚知	をぼす	しらす	金光明
愛尚	あいす	たふとぶ	三蔵
聚積	あつまる	つむ	三蔵

危困	あやうく	くるしむ	三蔵
致使	いたす	せしむ	三蔵
出入	いづ	いる	三蔵
營建	いとなむ	たつ	三蔵
貿易	うる	かふ	三蔵
簡募	えらぶ	つのる	三蔵
拜臨	おがむ	のぞむ	三蔵
憤懣	おこる	いかる	三蔵
驚慚	おどろき	はじる	三蔵
驚懼	おどろく	おぢる	三蔵
驚愕	おどろく	おどろく	三蔵
逐尋	おふ	たずねる	三蔵
想望	おもふ	のぞむ	三蔵
帰還	かえる	かえる	三蔵
重覆	かさねる	おほふ	三蔵
劫奪	かすむ	うばはれる	三蔵
包挫	かね	くだく	三蔵
芟夷	かる	たひらぐる	三蔵
聞承	きく	うけたまわる	三蔵
窮迫	きわむ	せまる	三蔵
窮極	きわむ	きわむ	三蔵
跋履	こえる	ふむ	三蔵
逾涉	こえる	わたる	三蔵
裁抑	ことほる	をさへる	三蔵
怖畏	こわる	おそる	三蔵
叫歌	さけぶ	うたふ	三蔵
候望	さぶらい	のぞむ	三蔵
邀請	さへぎる	こふ	三蔵
慕樂	したう	ねがふ	三蔵
信慕	しんじる	したふ	三蔵
抄寫	すく	うつす	三蔵
備陳	そなへる	つらねる	三蔵
尋訪	たずねる	とふ	三蔵
尋逐	たずねる	おふ	三蔵
尋省	たずねる	かへりみる	三蔵
匡振	ただす	すくふ	三蔵
携負	たつさく	おふ	三蔵
携負	たつさく	おふ	三蔵
憑恃	たのむ	たのむ	三蔵
恃仰	たのむ	あおぐ	三蔵
營構	つくる	かまふ	三蔵
爛眩	てらす	かがやく	三蔵

遵求	とうとい	もとむ	三蔵	驕楽	おごる	たのしぶ	太子
停絶	とどまる	たえる	三蔵	驚怖	おどろく	おづ	太子
詢問	とふ	とふ	三蔵	裝飾	かざる	おく	太子
詢求	とふ	もとむ	三蔵	悲愴	かなしぶ	いたむ	太子
詢採	とふ	さがす	三蔵	顧視	かへる	みる	太子
宗重	とほとす	おもむす	三蔵	乞求	こふ	もとむ	太子
停留	とまる	とどまる	三蔵	澆灌	こぶる	ながる	太子
執守	とりす	まもる	三蔵	指示	さす	しめす	太子
鳴吼	なく	ほゆ	三蔵	識知	さとる	しる	太子
擔携	になふ	たださはる	三蔵	縛繫	しばる	つなぐ	太子
担運	になふ	はこぶ	三蔵	保守	たもつ	まもる	太子
宣示	のべる	しめす	三蔵	解放	とく	はなつ	太子
登履	のぼる	ふむ	三蔵	問索	とふ	もとむ	太子
上発	のぼる	あがる	三蔵	拘閉	とらへる	をさむ	太子
励勉	はげまし	つとむ	三蔵	望待	のぞむ	まつ	太子
引示	ひく	しめす	三蔵	開解	はれる	とく	太子
俯僂	ふす	かがむ	三蔵	迷荒	まどふ	ほる	太子
奮衝	ふるふ	つく	三蔵	哽咽	むやぶ	むやぶ	太子
掘挽	ほる	ひかす	三蔵	依附	よる	つかまつる	太子
錯綜	まじへる	ふさねる	三蔵	依托	よる	たのむ	太子
舞躍	まふ	ほどる	三蔵	跳踉	をどる	あがる	太子
研究	みがく	きわむ	三蔵	開發	あける	ひらく	大唐
哽泣	むやふ	なく	三蔵	宣語	かまびすく	かたる	大唐
啟申	もうし	のべる	三蔵	挙俯	あげる	ふす	大唐
求請	もとむ	こふ	三蔵	祈請	いのる	うけあふ	大唐
攀縁	よじる	たぐる	三蔵	崇重	うやまふ	たふとぶ	大唐
抖擻	あげる	ふるふ	沙彌	浸漬	うるおふ	あはたす	大唐
洗濯	あらふ	あらふ	沙彌	選募	えらぶ	つのる	大唐
洗濯	あらふ	すすぐ	沙彌	推尊	おす	たふとぶ	大唐
傷害	いたむ	くるしむ	沙彌	驚駭	おどろき	おどろく	大唐
言調	いふ	もてあそぶ	沙彌	驚懼	おどろく	おちる	大唐
言談	いふ	かたる	沙彌	追逐	おふ	すてる	大唐
受取	うく	とる	沙彌	覚知	おぼへる	しる	大唐
墾掘	くずす	ほる	沙彌	謀計	おもはる	はかる	大唐
裁割	たつ	きる	沙彌	驅逐	かかる	おう	大唐
拂拭	はらふ	のごふ	沙彌	畫畫	かく	さかふ	大唐
開知	ひらく	しる	沙彌	買鬻	かふ	ひさぐ	大唐
乾決	ほす	さくる	沙彌	剪剃	きる	そる	大唐
瞻觀	まばる	みる	沙彌	究察	きわめる	さつする	大唐
感謝哀	いたむ	かなしぶ	太子	逾勝	こえる	まさる	大唐
出入	いづ	いりす	太子	沈研	さとる	みがく	大唐
憂苦	うれふ	くるしぶ	太子	攻伐	せめる	うつ	大唐

攻劫	せめる	をびやかす	大唐	往來	ゆく	くる(きりて)	地藏
詭詐	たはる	いつはる	大唐	侵害	をかす	やぶる	地藏
崇敬	たふとぶ	うやまふ	大唐	仰臨	あおぐ	のぞむ	諷誦文
顛仆	たふる	ふす	大唐	飽足	あく	たる	諷誦文
怯懦	つたなふ	わろくす	大唐	明晦	あける	くるる	諷誦文
緘封	つつみ	かためる	大唐	聚集	あつまる	つどふ	諷誦文
輻湊	つどふ	あつまる	大唐	妄欺	いつはる	あざむく	諷誦文
貫徹	つらぬく	とほす	大唐	浮游	うかぶ	あそぶ	諷誦文
整肅	ととのへ	つづましめ	大唐	受収	うける	をさめる	諷誦文
禁御	とどめる	をさめる	大唐	遷改	うつろふ	あらたまる	諷誦文
慰問	とふ	らふす	大唐	修習	おこなふ	ならふ	諷誦文
載負	のせる	おふ	大唐	驚畏	おどろく	おそれる	諷誦文
陳告	のべる	つぐ	大唐	莊嚴	かざる	しつる	諷誦文
喰食	はむ	くふ	大唐	乞誓	こふ	のめる	諷誦文
排掘	はらふ	ほる	大唐	乞祈	こふ	のめる	諷誦文
瀟漫	ひろげる	ほどこす	大唐	備儲	そなへる	まうける	諷誦文
躡蹠	ふむ	のぼる	大唐	助濟	たすける	すくう	諷誦文
震摺	ふるふ	おちる	大唐	束収	たばねる	おさめる	諷誦文
震吼	ふるへる	ほえる	大唐	費衰	ついへる	おとろへる	諷誦文
彫刻	ほる	きざむ	大唐	仕奉	つかへる	まつる	諷誦文
酬対	むくいる	むかへる	大唐	造設	つくる	もうく	諷誦文
恵施	めぐむ	ほどこす	大唐	作飾	つくろふ	かざる	諷誦文
召命	めす	めいずる	大唐	敬唯	つつしむ	おもひみる	諷誦文
饋遺	やしなふ	おくる	大唐	恭敬	つつしむ	うやまふ	諷誦文
攀援	よぢる	とらへる	大唐	謹敬	つつしむ	うやまふ	諷誦文
欺凌	あざむく	しのぐ	地藏	摩触	なでる	ふる	諷誦文
教説	おしへる	とく	地藏	撫育	なでる	やしなふ	諷誦文
教習	おしへる	ならはしめる	地藏	濁穢	にごる	けがす	諷誦文
悚懼	おち	おそる	地藏	曳蒙	ひく	かづく	諷誦文
追逐	おふ	しく	地藏	曲諂	まがる	へつらふ	諷誦文
枯涸	からす	かれる	地藏	昏迷	まどふ	まよふ	諷誦文
超度	こえる	わたす	地藏	守扶	まぼる	たすく	諷誦文
茂実	しげり	みのる	地藏	充塞	みつ	ふたがる	諷誦文
誣調	しふ	とらへかす	地藏	見聞	みる	きく	諷誦文
薦推	すすめる	はかる	地藏	悶迷	もだへる	まよふ	諷誦文
賑恤	たまふ	めだむ	地藏	往來	ゆく	きする	諷誦文
恭敬	つつしむ	うやまふ	地藏				
營務	つとむ	いたはる	地藏				
流振	ながれる	ふるふ	地藏				
始畢	はじめ	をはる	地藏				
免離	まぬかれる	はなれる	地藏				
盛貯	もる	たくはふる	地藏				

表4 訓読資料における「手段-結果」複合動詞

漢文表記	前項訓読	後項訓読	出自
盛満	もる	みつ	金光明
断尽	たつ	つくす	金光明

増長	ふやす	ながからむ	金光明	寄止	やどる	とどまる	法師伝
除滅	じよす	ほろぶ	金光明	移就	うつす	つく	法師伝
教作	をしへる	つくる	金光明	斬毀	きる	やぶる	威儀経
飲酔	のむ	よふ	金光明	誤失	あやまつ	うしなふ	威儀経
裂壞	さく	こわれる	法師伝	尅傷	きる	やぶる	威儀経
量准	はからふ	なぞふ	法師伝	破裂	わる	さく	太子
誘開	こしらふ	ひらく	法師伝	破裂	われる	さく	太子
免脱	まぬかれる	のがる	法師伝	拂去	はらふ	さる	太子
迷失	まよふ	うしなふ	法師伝	発去	いづ	ゆく	太子
盈積	みちる	つむ	法師伝	遣去	おふ	やる	太子
剖析	さく	わかる	法師伝	摧裂	くだく	さく	太子
放還	はなつ	かえる	法師伝	去遠	ゆく	とほざかる	太子
訪獲	とふ	うる	法師伝	驚起	おどろく	いづ	太子
分留	わかつ	とどめる	法師伝	壊散	やぶる	ちる	太子
覆没	くつがへる	なくす	法師伝	折傷	をる	そこなふ	太子
慙服	はづ	ふくす	法師伝	依止	よる	とどまる	太子
登越	のぼる	こえる	法師伝	潜隱	かくれ	こもる	西域記
馴伏	なれる	ふす	法師伝	崩墜	くずれ	おちる	西域記
透出	つばくむ	いづ	法師伝	発動	やむ	おこる	西域記
凍死	こおる	しぬ	法師伝	損傷	そこなふ	いたむ	西域記
停住	とまる	すむ	法師伝	震動	ふるふ	うごく	西域記
殄喪	つく	ほろぶ	法師伝	招集	まぬく	あつむ	西域記
逃散	のがる	あがる	法師伝	召集	めす	あつむ	西域記
逃散	にげる	ちる	法師伝	失墜	うしなふ	おちる	西域記
逐出	おふ	いづ	法師伝	毀壞	そこなふ	こわる	西域記
退還	しりぞく	かえる	法師伝	摧毀	くだき	やぶる	西域記
送出	おくる	いづ	法師伝	驚走	おどろき	はしる	西域記
送着	おくる	つく	法師伝	毀滅	そこなふ	ほろぶ	西域記
瘞除	いえる	のぞこる	法師伝	挾去	くじる	さる	西域記
澄満	すむ	みつ	法師伝	亘窮	わたる	きわむ	地藏
就停	つく	とまふ	法師伝	備足	そなわる	たる	地藏
殺除	ころす	のぞこる	法師伝	調和	ととのへる	あふ	地藏
採乾	とる	ひる	法師伝	召集	しめす	あつむ	地藏
毀卻	やる	すでる	法師伝	拷楚	かかへる	いたむ	地藏
傾動	かたむく	うごく	法師伝	盛盈	もる	みつ	諷誦文
傾墮	かたむく	おちる	法師伝	投棄	なげる	うつ	諷誦文
摧毀	くだく	やぶる	法師伝	振裂	ふるふ	さく	諷誦文
摧落	くだく	おちる	法師伝	尽失	つく	うしなふ	諷誦文
摧制	くだく	せいする	法師伝	下徹	くだす	とほる	諷誦文
究通	きわめ	とほる	法師伝	残留	のこる	とどまる	諷誦文
切割	きる	わく	法師伝	毀壞	こぼれる	やぶる	諷誦文
窮尽	きわめる	つく	法師伝	折碎	おる	くだく	諷誦文

表5 中古の和文文献における「手段-結果」複合動詞

漢文表記	前項訓読	後項訓読	出自
飢死	うえ	しぬ	今昔
餓死	かつえ	しぬ	宝物
倒死	たおれ	しぬ	今昔, 好忠
干死	ひ	しぬ	宝物
惑死	まどい	しぬ	三宝
焼死	やけ	しぬ	今昔
病死	やみ	しぬ	竹取, 今昔
酔死	えい	しぬ	今昔
打落	うち	おつ	今昔
生落	うまれ	おつ	宇津保
崩落	くづれ	おつ	宇津保, 後撰
萎落	しばみ	おつ	今昔
散落	ちり	おつ	今昔, 宇津保
轟落	とどろき	おつ	栄花
抜落	ぬけ	おつ	今昔
脱落	ぬげ	おつ	今昔
転落	まろび	おつ	今昔, 三宝, 源氏
飛落	とび	おつ	今昔, 法華
踊落	おどり	おつ	今昔, 古本
射切	い	きる	今昔
打切	うち	きる	枕, 今昔, 宝物
押切	おし	きる	蜻蛉, 枕, 今昔, 寢覚, とり
搔切	かき	きる	今昔
食切	くい	きる	今昔, 宝物, 打開
差切	さし	きる	今昔, 打開
吹切	ふき	きる	今昔
引切	ひき	きる	今昔, 宝物, 寢覚, 古本
張切	はり	きる	和泉集詞
食切	はみ	きる	今昔
挟切	はさみ	きる	今昔
摘切	つみ	きる	今昔
裁切	たち	きる	宇津保, 古今
定切	さだめ	きる	枕, 今昔
打碎	うち	くだく	今昔
押碎	おし	くだく	今昔
折碎	おり	くだく	今昔
切碎	きり	くだく	今昔, 蜻蛉

割碎	さき	くだく	今昔, 三宝, 法華
擱碎	つかみ	くだく	今昔
綖碎	より	くだく	拾遺
打破	うち	やぶる	今昔, 宇津保
食破	うい	やぶる	今昔
押破	おし	やぶる	今昔
蹴破	け	やぶる	今昔
差破	さし	やぶる	今昔
叩破	たたき	やぶる	今昔
擱破	つかみ	やぶる	今昔
引破	ひき	やぶる	今昔, 源氏
吹破	ふき	やぶる	拾遺
踏破	ふみ	やぶる	今昔, 打開
穿破	うがち	やぶる	今昔
朽破	くち	やぶる	古本
崩破	くづれ	やぶる	今昔
乱破	みだれ	やぶる	今昔
破破	やぶれ	やぶる	今昔
割破	われ	やぶる	三宝
打毀	うつ	こほつ	枕
押毀	おす	こほつ	落窪
切毀	きる	こほつ	今昔
引毀	ひく	こほつ	源氏
踏毀	ふむ	こほつ	狭衣, 今昔
焼毀	やく	こほつ	今鏡
破毀	やぶる	こほつ	今昔

調査資料

- ・「西大寺本金光明最勝王經古点」: 春日政治. 1985. 西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究・資料編: 勉誠社.
- ・「東大寺図書館蔵本地蔵十輪經元慶七年点」「石山寺蔵本法華經玄贊淳祐古点」「石山寺蔵本法華經義疏長保四年点」: 中田祝夫. 1979. 古点本の国語学的研究・訳文篇: 勉誠社.
- ・「石山寺蔵沙弥十戒威儀經角筆点」: 小林芳規. 1987. 角筆文献の国語学的研究・影印資料篇: 汲古書院.
- ・「天理大学図書館蔵・国立京都博物館蔵南海寄帰内法伝古点」「竜光院蔵本妙法蓮華經古点」: 大坪併治. 1968. 訓点資料の研究: 風間書房.
- ・「興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点」: 築島裕. 1965. 興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古点の国語学的研究・資料篇: 東京大学出版会.
- ・「東大寺諷誦文稿」: 中田祝夫. 1979. 東大寺諷誦文稿の国語学的研究: 風間書房.

・「石山寺藏佛説太子須陀摩訶經平安中期点」：松本光隆&鈴木恵.1984.「石山寺藏佛説太子須陀摩訶經平安中期点・索引篇」*訓点語と訓点資料* (71・72) : pp233-268.

・「聖語藏御本成実論天長五年点」：鈴木一男. 1966. "成実論卷二十三天長五年点訳文稿." *南都仏教* 18: 36-51; 鈴木一男.1956. "聖語藏御本成実論卷十八天長五年点について" *奈良学芸大学紀要* (5) 1:23-36; 鈴木一男. 1956. "聖語藏御本成実論卷十一天長五年点訳文稿." *書陵部紀要* 6: 1-18; 鈴木一男. 1955. "聖語藏印本成実論卷十三天長五年点訳文稿." *奈良学芸大学紀要* (4) 1: 67-78; 鈴木一男. 1957. "成実論卷二十二天長五年点." *書陵部紀要* 8:19-39.

・万葉集検索システム Ver.2.2.0 : 山口大学表現情報処理コース.
http://infux03.inf.eduyamaguchi-u.ac.jp/~manyou/ver2_2/manyou.php

・大系本文データベース (旧日本古典文学本文データベース) .
<https://base3.nijl.ac.jp/> : 国文学資料館. 原典 : 日本古典文学大系 (岩波書店 : 1957-1969)

参考文献

- 1) 青木毅, 『水鏡』における複合動詞の諸相 : 文体分析のための基礎的調査として, 『国文学攷』190号, pp1-13, 2006.
- 2) 岡野幸夫, 『とはずがたり』の複合動詞 : 数量的概観, 『鎌倉時代語研究』23:pp741-755, 2000.
- 3) 影山太郎, 『文法と語形成』, ひつじ書房, 1993.
- 4) 影山太郎, 「英語結果構文と日本語結果複合動詞における force dynamics」 『人文論究』54:pp 26-40, 2004.
- 5) 影山太郎&由本陽子, 『語形成と概念構造』, 研究社出版, 1997.
- 6) 魏培泉, 「上古汉语到中古汉语语法的重要发展」, 『古今通塞: 汉语历史与发展』, 中研院语言学研究所, 2003.
- 7) 阪倉篤義, 『語構成の研究』, 角川書店, 1966.
- 8) 朱慶之, 『佛典與中古漢語詞彙研究』, 文津出版社, 1992.
- 9) 朱慶之, 『佛教汉语研究』, 商務印書館, 2009.
- 10) 陳劫憚, 「結果複合動詞の語形成の意味条件と生産性」, 『言語科学論集』13号:pp 83-94, 2009.
- 11) 東辻保和, 『平安時代複合動詞索引』, 清文堂出版, 2003.
- 12) 徳本文, 「上代の複合動詞 : 前項と後項の意味関係から」, 『立教大学日本文学』102号:pp 114-124, 2009.
- 13) 野村雅昭, 「サ変動詞の構造」, 『日本語研究と日本語教育』, 明治書院, 1999.
- 14) 藤井俊博「統紀宣命の複合動詞 : 漢語との関係を中心として」, 『國文學論叢』34号: pp1-17, 1989.
- 15) 藤井俊博, 「今昔物語集の漢語サ変動詞 : 複合動詞の構成を通して」, 『同志社大学留学生別科紀要』1号: pp17-29, 2001.
- 16) 松下大三郎, 『標準漢文法』, 紀元社, 1927.
- 17) 柳田優子, 「古代語における動詞連体形節内の格付与について」,

『Scientific approaches to language』5号: pp181-194, 2006.

18) 呂叔湘「说“胜”和“败”」, 『中国语文』1号: pp1-5, 1987.

19) Whitman, John and Bjarke Frellesvig. "The Historical Source of the Bigrade Transitivity Alternations in Japanese". *NINJAL International Symposium 2012: Valency Classes and Alternations in Japanese: National Institute of Japanese Language and Linguistics*. 2012.

付記 本稿は、国立国語研究所・「国際シンポジウム2013：日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎」における口頭発表の内容に加筆・修正を加えたものである。席上、青木博史先生、沈力先生をはじめとする先生の方々からいろいろ有益なご意見・ご教示を賜って厚く御礼を申し上げる。